

最終報告

素材広場 第9期インターン生 ニックネーム：スーツ

研修目的

- ・ たくさんの社会人に触れ、自分にとっての職業意識を形成するため。
- ・ 地域の特色を活かしたビジネスを学ぶため。
- ・ 福島の復興の手助けになるため。

研修作業内容

9月3、10、13、14日 渡部柿園さん



3日は、柿の木を支えるための、棒の取り付けを行った。

柿の実が大きくなることによって、枝が折れるのを防ぐ作業であったが、どこか垂れていて、どこに取り付ければいいのか最初のうちはあまりわからず、お手伝いとは言い難い、苦い初日の農業体験だった。

最後に、家庭菜園のサツマイモの収穫、かぼちゃの収穫、かぼちゃ畑の片付けを行ったので、かろうじてお手伝いできたかなという感じであった。

10日は、11月からの柿の出荷に向けた倉庫の片付けを行った。

倉庫に保管されているサイズ別の箱をサイズごとに整理することが主な作業内容であったが、サイズ別の箱をサイズごとに分けるのも一苦勞で、渡部柿園さんの出荷数の多さを感じた。

13日、14日は、反射シート敷きを行った。

反射シートを敷く理由としては、天からの日が当たらない低い枝になっている実に対し、白のシートを敷くことで、反射させ、下から日を当てるという効果をもたらすためだそうだ。

渡部さんは、「普通に日が当たっているものに関しては作物が自分で育つから誰にでもできる。その一方で、あまり日が当たらず、成長しない実を育て、個数を増やすことにこそ意味がある」とおっしゃっていた。

14日には、昨年はずっと降雨が続いたため、敷かなかった、援助金が出たときに購入した反射シートを使用。昨年は雨続きだったが、今年は晴れ続きで、稲にいらないけど、柿には少し雨がほしいと嘆いていた（当時）。

実際には、渡部さんの指示で敷いたため、影響は出ていないが、日が当たっていない低い枝を見つけ、そこに日を当てるようにシートを敷くという作業は、素人にはとうていわからない、経験がものをいう作業であるように感じた。

渡部柿園さんでは、柿と米の出荷を行っているが、ともにエコ・ファーマーを取得している。

※ エコ・ファーマーとは、持続性の高い農業生産方式（堆肥等による土づくりを基本とした化学肥料、化学農薬の使用量を低減する方式）の導入計画を、県知事に認定された農業者のことをいう。

エコ・ファーマーの取得にしたがって収穫量は減少し、価格も大して高くなるわけではな

いが、それでも取得するのは、渡部さんのより良いものを食べてもらいたいというこだわりからきているように感じた。柿の価格を何十年間も一切上げないというところにも自分でこだわりぬいて作ったものへの自信が見られる。

良いものを作るために、時間やお金などの手間を惜しまない渡部さんの姿勢を見習っていききたい。

そんな渡部さんでも、今年はどうなるかわからないと不安を抱えている。米・柿ともに出荷の時期がこれからということもあり、実際には、まだ風評被害を受けてはいないが、今後出荷をすれば、何かしらの影響を受けることも大いに考えられる。

9月4、7、8、9、16日 築田さん宅



4日は、きゅうり収穫後のビニールハウスの片付けを行った。

一般的に、作物を育て、収穫するまでに目がいきがちだが、その後の片付けるという作業があることも忘れてはならないと実感した。また、築田さん宅で驚いたことは、1つのビニールハウス内に何種類もの野菜が植えられていることである。築田さんの話では、どうやら土壌に秘訣があるよう。

7日は、白菜の苗植えを行った。

植える作業を初めて行ったため、店頭に並ぶ白菜と苗とのギャップを感じたとともに苗を1つずつ植える地道な作業に、農家の大変さを感じた。また、昔の農家は価格が一定だったため儲かっていたが、今は外国産の介入により、価格が下がる一方であまり儲けはないなど厳しい現状についても話していただいた。昨年9月の大雨から大雪、原発による出荷停止などこの1年間は収入がほとんどなく、特に大変だったそうだ。

8日は、白菜の苗植え、枝豆の収穫を行った。

前日に引き続き、白菜の苗植えを行ったため、慣れはあったが、築田さんのスピードには到底追いつかず、経験の差を感じた。枝豆の収穫後のもぎ取り作業では、枝豆のもぎ取り機を使用。取りきれなかった分を手作業でもぎ取った。枝豆のもぎ取り機は、原発による出荷停止に悩んでいた今年の春に、枝豆で出荷できなかった場合でも、大豆にして出荷できると考え、苦渋の決断で購入。

9日は、枝豆の収穫、メロン畑の片付けを行った。

枝豆は、前日をやや上回る収穫ができた。メロン畑の方は、植え付けが遅かったようで、今年は上手くできなかったそうだ。お金をかけて、手をこめて育てても作物が収穫できないこともあるという農家の厳しさを実感した。

16日は、モニターツアーの準備として、ビニールシート拭き、長ネギの皮むき、里芋掘りを行った。

里芋のなり方に興味を抱いたとともに築田さん宅の野菜の豊富さを改めて実感した。

何かと被害が多く、大変な時期にも関わらず、前向きに考えて生きている築田さんの姿勢を見習っていきたい。

9月17日 原瀧さん

17日は、ディナーのお手伝いとして、会場設置、飲み物オーダー、飲み物運び、下膳を行った。

感じたこととしては、表と裏の差である。表では、お客様にゆっくりくつろいでもらおうという雰囲気を出す一方、裏では、何人のお客様が同時に来ようとそれぞれの最適なタイ

ミングでお食事を出さなければならず、お客様が重なれば重なるほど大忙しになるということである。通常は客側の視点だったのでわからなかったが、初めてお店側に立つことによってわかるものであった。

9月19～29日 山形屋さん



山形屋さんでは洗浄作業、調理補助、下膳、風呂清掃、客室清掃、布団敷きを行ったが、重点的に行ったものとして以下の仕事が挙げられる。

洗浄作業

1日目からほぼ毎日、欠かすことなく入った洗浄作業。食器洗浄機はあるもののそれだけでは落ちない汚れもあるため、軽く手洗いしてから洗浄機にかけ、片付けるという作業を何度も何度も繰り返すというものであるが、食器の種類が大量にあるため、収納場所もわからず、スピーディーにこなさないといけない仕事にもかかわらず、初めはとにかく時間がかかってしまった。

ここで感じたこととしては、一日で使う食器の量の多さである。例えば、100人が1回の食事に10個の食器を使うとすると、朝、昼、晩合わせて3000個の食器を使うことになる。それに伴い、3000個の食器を洗う人が必要になるということである。満室の時には、終わりが全く見えず、ひたすら無心で皿と向き合うしかないというとてもハードな場所だった。

調理補助

盛り付けや使用する食材の下準備を行った。1つ1つに手間をかけることで、本来の食材を活かした美味しい料理が誕生するというを自ら体験することで、改めて実感することができた。

風呂清掃、客室清掃

この中では特に、お客様の視点を意識することが大切な仕事であるように感じた。どこに何をどのように置けば、お客様がより快適に過ごすことができるかを考え、作業をすることが大事であり、逆に言えば、特に、おもてなしを感じてもらえる場所のようにも感じた。

布団敷き

布団敷きはお客様が夕食をとっている最中に敷き終えなければならないという、この中でも一番とっていいほど、スピードを必要とするものであり、さらに丁寧さも持ち合わさなければならないととても難しい仕事の1つであった。

全体を通して・・・

年中無休、24時間フル営業と言ってもいいくらい、想像とはかけ離れた忙しさが旅館にはあった。そのため、どれだけスピーディーに1つ1つのものごとをこなしていくか。また、サービス業なのでどれだけ1つ1つをお客様が来て良かった、また来たいと感じていただけるよう、ホスピタリティ溢れるおもてなしを行うことができるか。

というこの2つの精度を同時にいかに上げていけるかが旅館業の永遠の課題の1つなのではないかと感じた。

その他のイベント

熱塩加納地域づくり懇談会（9月13日）、熱塩絶叫大会〈喜楽里博〉（9月17日）、ヒルクライム（9月25日）



熱塩絶叫大会では、福島県民の熱い思いが伝わる絶叫が連発。根拠は何もないけれど、いずれ福島は復興できると確信した瞬間であった。

ちなみに、優勝はALTの「頑張っぺ！福島」。

→熱塩は山形屋社長を先頭に、震災復興も含め、地域活性化に向けてとても積極的に動いているように感じた。

会津地域経営者アカデミー（9月27日）

その名の通り、会津地域の経営者が集まり、今後の会津について話し合うためのものであるが、その場で、たくさんの経営者とお話しすることができ、経営者として大切なことを教えていただいた。

「お客様や従業員など人に対し、常に感謝すること」や「自分の意見を貫き通すこと」の大切さなど、よく考えてみると経営者の前に1人の人として大切なことであり、他者と自分を大事にして生きていくことが成功する秘訣でもあるのではないだろうかと感じた。

山形屋社長について

熱い人であり、積極的に仕掛けていく策士。また、感謝の心を忘れず、常に自分より後ろの人を立てる人。そして何よりも山形屋、熱塩、福島を愛している人。

山形屋社長のようにどんな状況でも、何事にも積極的に挑戦していく姿勢を見習いたい。

今後はどう活かすか

- ・ **向上心**
- ・ **前向き**
- ・ **積極性**
- ・ **諦めない**
- ・ **主張(提案)**
- ・ **感謝**
- ・ **(効率性)**

終わりに

中間報告時の課題として挙げた「放射線量の数値的には何も問題ないが、一向に風評被害が絶えないことに対して、どうしていくべきか。」ということについては、観光地側の対策としては、初心に戻り、地元の美味しい食材と観光場所をセットにした魅力あるプランを地道に作っていくことが大事のように思う。

また、自分でできる行動としては、まずは福島の正確な情報を身近な人に発信していくことである。「本当の福島」、「ありのままの福島」をより多くの人に知ってもらい、福島の風評被害を少しでも減らしていきたい。